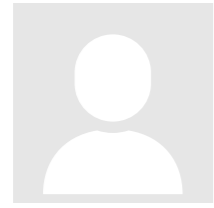


TOPICS

新任医師のご挨拶



心臓血管外科 医師 白崎 幸枝 (しらすき ゆきえ)

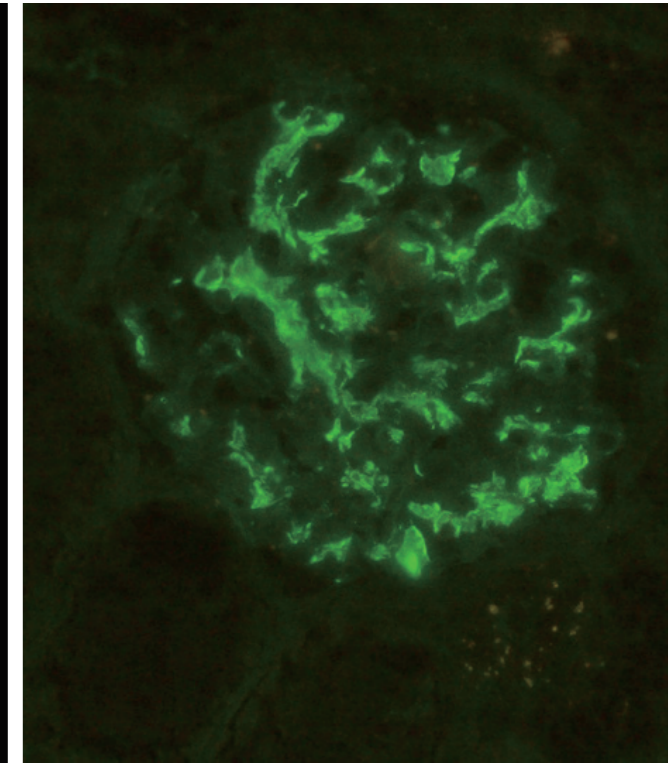
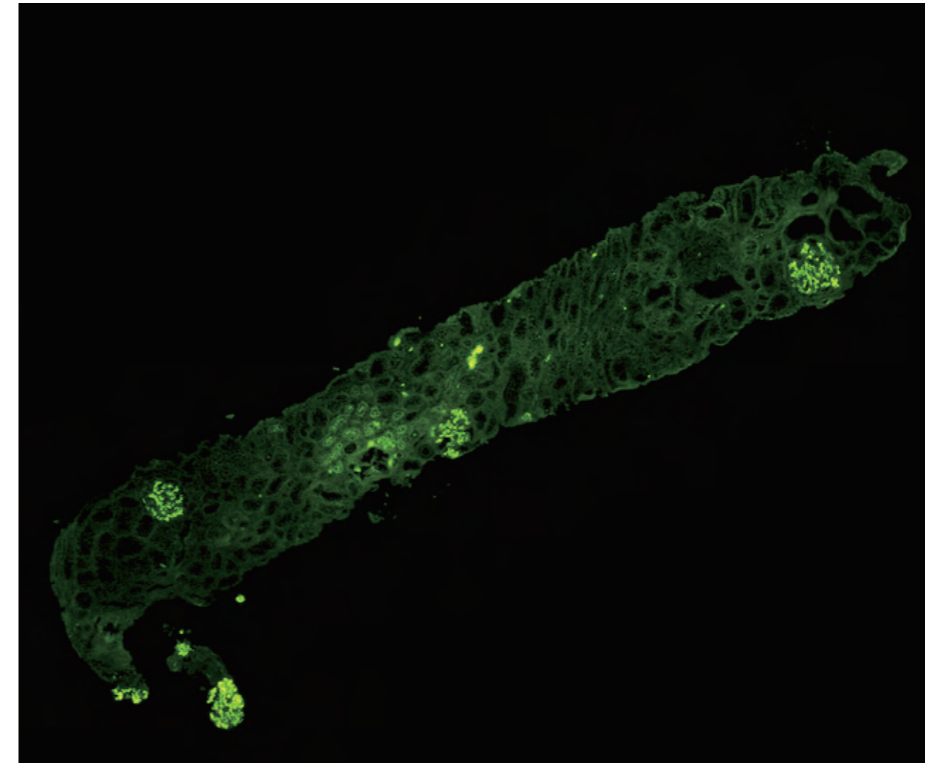
本年6月に大阪南医療センター心臓血管外科に赴任しました白崎です。心臓血管外科で女医となると珍しいと言われることもまだまだ多いですが、私の場合は他職種で働いた後再受験を経て今に至るところも珍しい経歴と思います。その経験も生かして患者さんに満足していただける医療を提供できればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

MINAMI MADO

2024.7. No.47



独立行政法人 国立病院機構
大阪南医療センター



大阪南医療センター 循環器疾患センター



胸背部痛、呼吸困難、動悸等
循環器疾患が疑われる際には
緊急対応連絡先へご連絡ください。

24時間緊急対応 (ハートコール)

直通 TEL : 0721-53-3200



Instagramはこちら ▶



LINEはこちら ▶



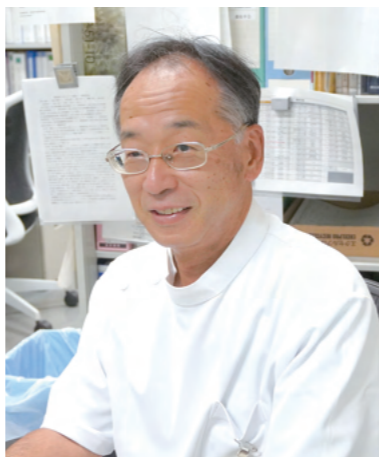
日本のトップを走る

— 病理診断科 —

—今回、病理診断科に蛍光染色に対応したバーチャルスライド画像作製機が整備されたとのことで、関係者にお話をお聞きしました。

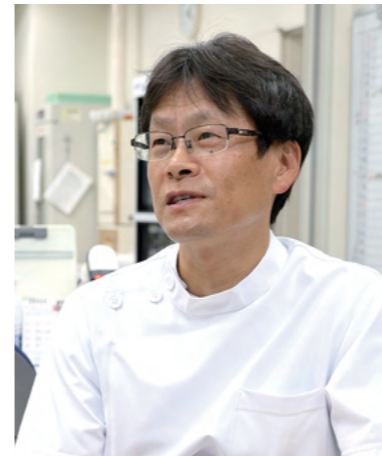
星田義彦 (病理診断科医長)

当院では以前より診療科からの希望があれば病理診断で用いたスライド標本をデジタル画像として取り込み、電子カルテの各PC端末から倍率、視野の変更などの操作をキーボード上で行って閲覧できるようにしておりました。この3月より作製機が更新され、蛍光染色標本もバーチャルスライド画像化できるようになりました。



病理診断科医長
星田義彦

通常の蛍光染色標本では発光色素は1ヶ月ほどで失活し、観察できなくなります。また、検鏡のためには暗室での作業が必要となり、また特別な専用顕微鏡を必要とします。蛍光染色標本のバーチャルスライド画像化はこれらの欠点を解消し、しかも一旦取り込むと永久に記録が残り何度でも観察することができ、且つ電子カルテのPC端末であればどこからでも観察できます。



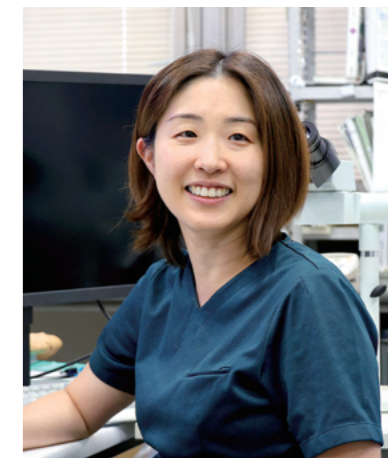
腎臓内科医長
安東豊

安東豊 (腎臓内科医長)

腎臓内科では10年前よりバーチャルスライド画像を電子カルテのPC端末で臨床医自ら閲覧し、外来診療の際の患者説明や院内のカンファレンスで用いてきました。当科の扱う疾患ではIgA腎症やSLEなど一部の膠原病で、蛍光所見が重要な診断の決め手となります。従来の染色標本に加えて蛍光染色標本のバーチャルスライド画像も閲覧できることは当科の医療レベルの向上に繋がっております。

加藤麻衣子 (皮膚科医長)

皮膚科でも天疱瘡やSLE、血管炎などで補助的診断に蛍光染色を用いています。蛍光染色標本のバーチャルスライド画像を外来ブースや医局のPC端末からみること、皮膚科医が全ての領域を自分でも観察できるようになり、若い皮膚科医の研修にも役立っております。



皮膚科医長
加藤麻衣子

星田 この機器を販売している浜松ホトニクスの方の話では、『蛍光染色標本のバーチャルスライド画像を臨床の現場で実用化している医療機関は日本で今までなかった。』ということです。

—まさに今、大阪南医療センターが日本のトップを走っていることがわかりました。医療レベルの向上と若手医師の教育の両翼を担う、新たな機器の今後の活躍に期待です。